

令和3年度

# 横手食育見聞録 優秀作品集

市内小学校5年生が、  
ふだん農業に対して思っている  
ことを作文、図画にしたものです。  
ぜひとも、子どもたちの純粋な  
気持ちを感じてみませんか。

## 目次 (Contents)

食農教育の推進に向けて	
作文の部	
最優秀賞 . . . . .	P 1
優秀賞 . . . . .	P 2 ~ 6
図画の部 . . . . .	P 7



横手市農業委員会



## 食農教育の推進に向けて

### 横手市農業委員会

当会では、多様な農業情勢に対応するため、三つの委員会を設置しています。その中の、広報・食農推進委員会では、食育教育に必要な情報提供活動や、地域における実践活動を推進しており、その一環として、教育委員会と連携し、「横手食育見聞録作文・図画コンクール」を平成十八年から継続して実施しております。

今回で十六回目となるこのコンクールは、小学生が自ら「食」について考える習慣を身につけ、生涯を通じて健全な食生活を実現することが、心身の発育上、大切であるとともに、ひいては今後の農業振興に役立てるためとしております。

また、総合学習等に基づき、何らかの農業に関する学習を実践している小学校五年生を対象に「自らの農業体験」や「ふだん、農業について感じていること」を作文、

図画にしてください、優秀作品については表彰するとともに、広報誌「横手市農業委員会だより」や横手市ウェブサイトに掲載、横手交流センター2Yぷらざにて展示するなど広く公開し、市民に食育の重要性を働きかけてまいりました。

今回、応募作品が作文の部で一五一点、図画の部で四五〇点あり、十二名の審査員による審査の結果、作文の部で最優秀賞一点、優秀賞五点、図画の部で最優秀賞一点、優秀賞五点が決定したところです。

今回の作品も選考段階で甲乙つけがたい内容であったとともに、作品を通じて、小学生の視点から見た農業に対する思いを、ぜひともご覧いただければと思います。この作品を通じて今一度食について考え、家庭における規則正しい食生活が大切であることを考えていただく機会として、この作品集が何かのお役にたてれば幸いです。



最優秀賞

「農家のお父さん」

大雄小学校 鈴木 ひかり

わたしのお父さんは農家で、お米を育てています。でも、会社員でもありません。ずっと大変そうだなと思っていたけど、学校で田植え、稲刈り、お米の販売を通して、改めてお米を育てる大変さが分かりました。

田植えの日は、雨が降っていて、少し肌寒かったです。わたしたちは、雨が降っていても、少し肌寒かったです。田植えは、思ったよりも過こくでした。雨はふって寒いし、ドロに足を取られるし、一歩ふみ出すごとに石をふんでしまって痛いし。そして、やっと稲を植え終わったところにはもうへとへとでした。でも、わたしたちは準備されたところからやっていただけ、農家さんたちは一から耕したり、水を引いたりして、やっと田植えをするから、すごいなと思いました。

稲刈りの日は、いい天気でした。かまで稲の根元のところを切るといいう作業でした。これは案外簡単でさくさく切れて気持ちよかったです。かまは、危なそうだったので、けがをしないように気をつけて使いまし

た。幸いクラスにけがをした人はいませんでした。お米の販売では、JA秋田ふるさとの店で売らせてもらえました。大きな声で宣伝したり、チラシを配ったりして、一生けんめい働きました。友達の家族や地域の人たちが来てくれました。働いたかいがあつて、お米は全部売れました。完売したときは、とてもうれしかったです。お米がわたしたちのところに届くには、たくさんのお米の人の協力のおかげで成り立っていることが分かりました。

お父さんは、四月や五月ごろ、わたしが朝起きるときにはふとんの中に姿はありません。外で田んぼの仕事をしています。仕事から帰ってくると、田んぼに行ってしまう。大変そうだから手伝いたいです。

この前、新米を食べました。お母さんの手作りのからあげと、わかめのみそ汁はよく合いました。お米は白くてとてもきれいでした。食べてみると、とてもおいしかったです。

お米を育てるお父さん、そんけいします。



優秀賞

「おいしいりんごにありがとう」

横手南小学校 小西 来夏

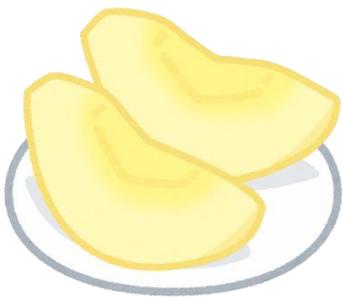
十月頃になると、わたしの家の朝ごはんの食卓にはりんごがいつもなんでいます。わたしはりんごが大好きで、食後には必ずこのおいしいりんごを食べます。社会科の学習で地元で作られている農作物を調べました。いつもあたりまえのように食べているりんごは、平鹿町馬鞍の知り合いの果樹園で作られたりんごだと初めて知りました。

わたしのうちではお歳暮にこの果樹園で作られたりんごをお世話になった方たちに毎年贈っています。そしていつも「とてもみずみずしい、甘くておいしいりんごをありがとう！」「今まで食べたりんごの中で一番おいしかったよ！」というお礼の言葉をいただきます。自分が暮らしている横手市の自まんのりんごをいろいろな地域の人に知ってもらい、そして「今まで食べたりんごの中で一番おいしい」と言ってもらえたことがとてもうれしかったです。

こんなにおいしいりんごはどのようにして作られて

いるのか、知り合いの果樹園の生産者に聞いてみました。平鹿町馬鞍は土じょうに恵まれていて、適度の日照時間や寒暖の差がおいしいうりんごにしてくれるといえます。しかし、それだけではおいしいうりんごはできません。二月から始まるせん定作業は、その時のりんごの木の状況から判断してせん定します。ベテランでもその判断が難しく、毎年せん定の方針を勉強するそうです。せん定技術は「生涯勉強」だとおっしゃっていました。七月には摘果作業、八月には台風対策をし、秋の収穫まで一年を通して休む間もなく大切に育てられて、わたしたちはおいしいうりんごを食べることができると知りました。

きょうもわたしは蜜でいっぱいのおいしい平鹿りんごをいただきます。生産者の努力と自然の恵みに感謝しながら食べたきょうのりんごは特別な味がしました。そしてわたしは、平鹿りんごをたくさんの人に広めたいです。



優秀賞

「つづけ、ふるさとの味、ぼくの家の味」

横手南小学校 小坂 祥太郎

つづけ、つづけ、ふるさとの味——。ぼくがふるさとの食文化について考えるきっかけとなったのは、「ハチごはん」という一冊の本だった。岐阜県では、ハチの子を甘露煮にして食べているというのだ。まさか虫を食べるなんてと、おいしそうに食べる子どもたちの笑顔が、ぼくには信じられなかった。

でも、虫を食べる料理がこの秋田にもあることを母から聞き、またまたびっくり。それは「イナゴのつくだ煮」。祖父に聞くと、小さいころ、秋になると学校のみんなでイナゴ取りをし、それを調理して食べるのがとても楽しみだったんだよと教えてくれた。でも、今は農薬を使っているせいかな、昔のようにイナゴを見なくなってしまうなども話していた。祖母も小さいころ、自分のおばあちゃんを作ってくれるイナゴのつくだ煮が大好きだったそう。秋にいっぱい取ったイナゴを、少しでも長い間おいしく食べられるようにと砂糖としょう油でじっくり煮つけてつくだ煮にしたん

だよとも教えてくれた。一年に一度、その季節にしか味わうことのできないものを大事に食べる工夫だったのかもしれない。

祖母が大好きだったイナゴも、今ではほとんど口にするのがなくなってしまった。今はスーパーに行けば、肉でも魚でも、何でもおいしい物が手に入る。でも、祖母から父母へ、父母からぼくたちへと受けつがれていく味は、もしかしたら少しずつ減ってきているのかもしれない。そう思うと、なんだか少しさびしい気持ちになった。ほろほろに鯉の甘煮、寒天料理にとうふカステラ、ひ頭なますに納豆汁。ぼくの家のお正月は、昔ながらのお膳料理だ。ぼくも祖父や父と同じように、毎年同じ味で新しい年をむかえてきた。「ばあばがいるうちに、もつといろんな我が家の味を覚えてもらわないとね。」

母の言葉だ。つづけ、つづけ。ふるさとの味。つづけ、つづけ、ぼくの家の味。



優秀賞

「りんご農家の仕事」

吉田小学校 佐々木 真衣

私のひいおじいちゃんは、りんごを育てています。私は、小さいころひいおじいちゃんのお手伝いをしました。その時したことは、採ったりりんごを集める仕事です。りんごを集める時に、りんごにきずがつかないように気をつけました。また、りんごをとる時は、真っ赤なりんごだけを採るようにすることを学びました。しっかりと赤くなっていないりんごは、太陽に当たって赤くなってから収穫するそうです。

りんご農家は季節によって仕事が変わります。春は、良いりんごができるようにいろいろな枝を切る作業をします。りんごの花がさき終わると、小さい実ができます。その中で一番形の良い実だけを残し、他は採ります。夏は、りんごに赤色をつけるためにりんごについている葉を取ります。そして、青い所は、太陽が当たるように、りんごを回します。秋は、りんごを収穫して選別をします。一つ一ついいねいに早く作業をすることが大切だそうです。冬は、雪にうもった枝が

折れないように、雪よせをします。

このように、りんご農家は、一年中いろいろな作業があり、とても大変な仕事です。私のひいおじいちゃんは、雪や台風など天気が悪い時も一生けん命働いていてとてもすごいなと思いました。そして、おいしいりんごを届けてくれて、とても感謝しています。

今年は、前の年と比べて天気が悪い日が多く、りんごをたくさん収穫することができませんでした。だから、来年の収穫に向けておいしいりんごをたくさん採れるようにお手伝いしたいと思いました。また、ひいおじいちゃんが仕事に一生けん命なので、私もスポーツや勉強を一生けん命がんばりたいと思います。



優秀賞

「食べることは命につながる」

横手北小学校 佐藤 廉

ぼくは、いつも何も考えずに食事をしていたので農業についてあまり考えたことがありませんでした。米作りを体験したり、ひいおばあちゃんの話を聞いたりしたことが農業について考えるきっかけになりました。

まず、米作りを体験して、二つのことを知りました。一つ目は、昔の人の大変さです。今なら機械で楽に作業できるけど人の手で作業するととてもつかれる大変な作業でした。五年生約七十人で作業しても一時間程かかりました。二つ目は、手間がかかることです。お米は水の管理や雑草が生えると大変だと農家の人に聞きました。植えはじめたころは水が多すぎると苗がうもれ、少なすぎると栄養がいきわたらないと知りました。雑草は、水口という水が入ってくるところの近くによく生えるので、しよ理が大変だと知りました。ぼくは苦労してお米を作っていることが分かったので、大切に食べたいと思いました。

次にひいおばあちゃんから二つのことを聞きました。一つ目は米作りの大変なところです。ひいおばあちゃんは苗作りが大変だと言っていました。毎日見なければかれてしまうからだそうです。苗を作るところから大変だと知りました。二つ目はひいおばあちゃんにとってお米とは何かです。ひいおばあちゃん「お米は命を助ける存在。食べなければ死んでしまうからね。」と言っていました。ぼくは生きる力をつけるためにお米をちゃんと食べようと思いました。体験をしてみても、お米は苦労して時間をかけてできたものだからそれをちゃんと考えて食べようと思いました。ひいおばあちゃんの話をお米は生きる力をくれるものだから大事に食べようと思いました。ぼくはお米のことについて書いたけれど他の食べ物も同じだと思えます。全部食べることで農家の人に感謝の気持ちを伝えられ、自分の命につながるのだと思います。



優秀賞

「農家の減少」

吉田小学校 佐藤 広琉

ぼくの家の回りには水田や畑がたくさんあります。だから、農家さんが減ってきているとは、考えたことがありませんでした。ですが、学校で農家が減少していると学習しました。その時に、若い人が少ないということも知りました。そして将来農家になろうと思いましたが、二〇二二年も祖父、祖母、父の米作りや野菜作りを手伝いたいと思いました。

ぼくは、減少の原因は若い人の減少と考えます。なので、近くの若い人に農業をやってみませんか？と声をかけてみたいと思います。農業をしている人のほとんどがお年寄りの方々です。だからぼくは、将来若いうちに農家になろうと思います。最初に始めるときは、むずかしいと思います。けれど、今農家の人も、昔始めたときは、むずかしいと思っただけです。だからぼくは、がんばろうと思えます。祖母と祖父に大切な事を聞くと、食べ物をつくることで大事なことは、全部。だけど、つくることだけでなく、食べてい

る人の笑顔を考えて作ることも大切といっていました。ぼくは、将来祖母と祖父が心がけていることをぼくも心がけていきたいと思っています。そして、手伝う時もこのことを心がけたいと思います。そして今、若い人たちが食べる物が小麦のものが多くなっています。だから若い人にむけてインターネットでのはんばいもやっていきたいと思っています。この作文を書いて、あらためて、農業をさかんにすることは大変だと思いました。でも農家になろうという気持ちが強くなりました。



# 第16回横手食育見聞録図画コンクール優秀作品

【最優秀賞】雄物川小学校 5年 藤田陽愛さん<sup>ひあ</sup>  
「おいしく育つようにと願いながら」



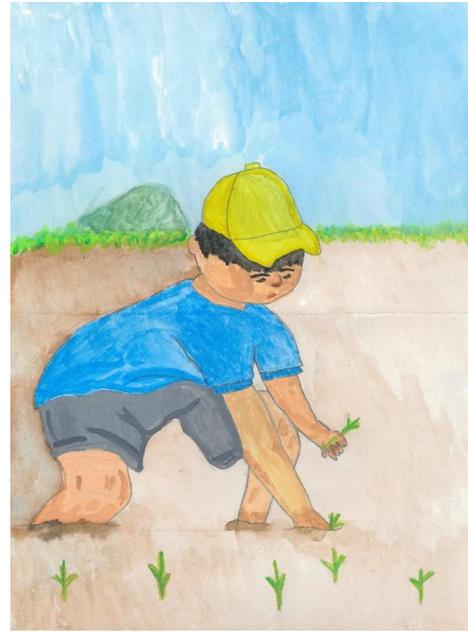
【優秀賞】大雄小学校 5年 斉藤千夏さん<sup>ちなつ</sup>  
「農家さんのおかげで食べられる物」



【優秀賞】朝倉小学校 5年 佐藤蒼維さん<sup>あおい</sup>  
「どんどん育て」



【優秀賞】横手北小学校 5年 松井誠志郎さん<sup>せいしろう</sup>  
「学校の田植え」



【優秀賞】横手南小学校 5年 柴田太一さん<sup>たいち</sup>  
「おじいちゃんとおぼくのリンゴとり」



【優秀賞】横手南小学校 5年 村田聖夏さん<sup>せな</sup>  
「アスパラガスのしゅうかく」

